

樋口一葉と張愛玲の比較研究—近代女性の表象世界—	
張 晋文	比較社会文化学専攻
期間	2007年12月26日～2008年1月15日
場所	中国北京・上海
施設	中国国家図書館 北京大学 上海図書館 復旦大学

内容報告

中国近代女性作家張愛玲（1920～1995）及びその作品を、樋口一葉の人と作品と比較する作業を行うために、今回、張愛玲の生い立ち、その作品に関する一次資料を幾つかの図書館を利用し集めた。これらの資料は、日本では入手不可能であり、中国での調査が必須であった。張愛玲は上海で生まれ、前後二十五年間そこで生活した。すなわち、上海は彼女にとって最も親しみ、大きな成功を遂げた場所であると言える。そこで、上海図書館、復旦大学図書館を回って調査を行い、関係する資料を収集した。さらに、35歳（1955）から生涯を閉じるまでずっと、アメリカで隠居生活をしていた張愛玲は、英語で多くの小説を書きながら、脚本も作っていた。後に、それらの作品は彼女自身によって中国語に翻訳され、香港、台湾などの地域で刊行され、大きな人気を得た。したがって、張愛玲の中国大陸以外の各地域での創作活動、及び海外における評価についても、国家図書館などにおいて調べた。以下、本研究調査の内容をまとめて報告する（以下の文章は、上記の図書館ほか研究機関で収集した資料に基づくものである）。

1. はじめに

1911年は辛亥年であるが、その年、中国において孫文ら一同を中心とする民主主義革命は最後の王朝—清朝を倒した。歴史上において、これを「辛亥革命」と称し、これによって中華民国が誕生した。だが、既に列強諸国に分割されていた中国は、当時半封建半植民地社会になっていたのである。当時上海にはイギリス、フランスなどの租借地が傲然と構えており、古くから賑やかなその地は「無国籍」地域となった。こうした半封建半植民地社会において、政治が多元化されたことによって、中華民族は深刻な屈辱を蒙っている。一方、西洋文化と密接することで、西洋の自由主

義や古典フェミニズムなどの思潮が多く輸入され、そして、封建的で貧弱な旧中国は近代資本化への加速が促された。こうした新旧交錯する時期において、中国人の意識は一新されつつあり、民族精神が再度喚起された。そこで、1919年には最も重要な愛国運動と見なされた「五四運動」が興った。

「五四運動」は、反封建、反帝国主義のもとで興った最大の愛国革命運動であるが、これによって、家を出た「中国のノラ」が複数登場し、一部ブルジョアの女性作家が登場した。だが、「五四運動」は本質的な意味であくまでも救国の運動で、女性主義革命ではないのだ。よって、それを母胎にして育てられた多くのプチ・ブルジョアの女性作家は、革命の立場、男性英雄との同盟を示そうとしながら、自己が彷徨ようという結果に陥った。彼女たちが階級に圧迫され、また時代による抑圧を受けたゆえに、その動乱の年月、戦時下の文化産物を中心にする表現意識を作品から読み取ることができる。これに対して、常に「人間の根本」に着眼する冷徹な創作主旨をとる張愛玲は、全く異色な存在である。作品において、愛玲は直接に「戦争」、「革命」に触れない代わりに、泰然と女性特有の視点を持ち、人間世界の恒久なテーマに注目しようとする。彼女は「自分の文章」①で言う。

私の小説において、『金鎖記』に登場する曹七巧という人物像以外、外のすべては徹底的ではないものだ。彼等は英雄ではないが、ただこの時代の広範な負担者である。（中略）彼等は弱い平凡者で英雄に劣っているが、これらの凡人こそは英雄よりもっとこの時代の総量を代表できるのだ。（中略）さらに、私は男女の間にある小さい事のみ書くが、私の作品において戦争もないし、革命もない。人間は恋に落ちた時、戦争と革命より素朴で、もっとわがままにしていると思う。真の革

命及び革命的な戦争は、恋愛と近い情調を持つはずだし、恋愛と同じように、その我儘さが人生の各方面に浸み込んでおり、それが自分自身に対して調和的だと思う。

この張愛玲の創作主旨から私たちは、時代の特殊性に拘束されない、女性の書き手の「生彩」、ないし「その完全性」を珍しく維持していることを見ることができる。この「泰然自若」といえる素質、あるいはその作品に漂った高い芸術性は、彼女の生い立ち、及び成長経歴と何らかの関わりがあるのか。この問題を巡って以下において検討してみたい。

2. 張愛玲の生い立ち

中国の近代史というと、歴史学者たちは「血と涙で書いたものだ」と、よくこのような言葉で表現しようとする。だが、このように深刻と思われ、内憂外患こどもがいたる時代においても、元清朝の遺老、及びその家族たちは依然として裕福でのんびりとした生活を過しているのだった。

1920年の9月30日に、張愛玲（張瑛）は上海のイギリス租借地にある三階建ての別荘（現存、上海泰興路にある）に生まれた。そもそもこの屋敷は愛玲の祖母である李菊耦の嫁入り道具の一つである。李菊耦は元清朝の直隸総督、内閣大学士などを歴任した李鴻章（1823～1901）の三番目の娘であるが、22歳のとき父親の意見に従って、彼女は自分より19歳年上である清朝の重臣—張佩綸と結婚した。すなわち、張愛玲は李鴻章の曾孫である。

政治家としての李鴻章は、清朝の朝廷で四十年あまり国務に携わっており、その期間中、中国が諸外国と締結した各不平等な条約—「下関条約」、「中俄条約」、「辛丑条約」などは全て彼の手によって締結されたものだ。長い間、「売国奴」などと指摘された李鴻章に対する史的評価は、20世紀80年代以後大きく変わったが、近代史を見る上で彼の存在を無視ができないのはまぎれもない事実である。

張愛玲の父親は、張佩綸と李菊耦の間に生まれた唯一の息子—張廷重である。この古い大家に育てられた男は意志が弱くて度量が小さかった。母親の黄逸梵は、初代（1864）長江水師の官長である黄翼升（後三等男爵）の孫である。「湖南人は最も勇敢だ」という古くから伝えられてきた伝説は、彼女によって再度実証された。張廷重の妹である張茂淵は口数が少ない代

りに、見識を持つ女性である。彼女は一生兄との仲が悪くて愛玲の母親と姉妹のように親しんだが、後年、長い間愛玲と二人で暮らしていた。張愛玲の家族において、また、一言に触れておく必要のある人物は彼女の継母である。両親が離婚してから、父親の再婚相手である孫用蕃は、元清朝の外務大臣を経て、後（1924）の国務総理を勤めた孫宝琦の娘である。才識とセンスにおいて、孫用蕃は黄逸梵とはまったく比べられないが、生活の面において、彼女は黄逸梵よりずいぶん頭が切れる人物だったらしい。こうして、張愛玲の家系を形成する李家、張家、黄家、孫家は、いずれも元清朝の遺老、近代中国の貴族社会をよく代表する大家である。「最後の貴族」②とよばれた張愛玲は、その誕生によって、中国近代文学史に華麗な一章を書き加えながら、その家族史を代々の中国人に忘れさせないのだ。

だが、その赫々たる家柄は愛玲の人生に不幸と辛酸を免ずることがない、寧ろ、彼女は他よりずいぶん波乱に富んだ人生を送ったと言える。両親はそもそも教養の高い人であり、特に、張廷重は中国の古典文学に広い知見を持ちながら、英語も得意だった。しかし、父親は古い伝統的な中国式に従う人間であるのに対して、母親は頑として屈しない性格で、加えてヨーロッパ文化に強く惹かれた「新女性」だったのである。生活における種々の不和によって、激しい夫婦喧嘩が絶えなかった。結局、意志の弱い張廷重は、賭け事をし、外で妾を囲った。更に、母親を絶望させたのは、父親が鴉片を吸うようになってきたことだ。

数え切れない夫婦喧嘩に飽き、夫の自堕落な生き方に絶望した黄逸梵は、とうとう1924年に四歳の娘と三歳の息子を残したまま、夫の妹である張茂淵と一緒にヨーロッパへ遊学にしてしまった。母親が渡欧してから、父親は妾を長期的に家に泊ませ、思う存分に賭け事をやり、鴉片を吸った。1928年に、張廷重は体調が急速に悪くなり、命が危なくなったことで、妻に鴉片や妾などをやめると約束し、ただちに帰国するようにと願いの手紙を出した。

黄逸梵は帰国後、フランスの医者から夫の病気を治療してもらい、娘を学校に行かせようとする。しかし、子供の教育に関して夫婦の意見はどうしても一致しなかった。母親は子供が学校で集団生活を味わい、多元的な知識を受けるべきだと主張するのに、父親は彼女の意見をまったく無視して、古い大家のやり方にした

がって子供が3、4歳から家庭教師をつけてやった。1930年に、黄逸梵は夫に隠してこっそりと愛玲をアメリカのミッション・スクールである黄氏小学校に連れていき、そこの六年生に編入させようとする。申し込みにあたって娘の名前が聞かれたが、母親は「張瑛」という名前が俗っぽいと思ったので、すぐその場で思いついた英語名の発音によって、彼女に「愛玲」と名づけた。

愛玲は学校で英語や国語などを勉強しながら、母親からピアノ、油絵、彫刻に関する教養を学んでいる。開明的な思想の持ち主であった黄逸梵は、国内の進歩的な新文学雑誌、新聞以外、英語版の雑誌、新聞を同時に予約購読している。小説をよく読んだ彼女は、好きな作品が見つかったら、興奮しながら朗読して娘に聞かせようとする。愛玲にとって、このような幸せな時間がある一方、両親の激しい喧嘩ぶりを絶えず目にし、父親が物を投げる凄まじい音、母親の泣き声に悩まされる日々も続いた。そこで、学校に入って間もなく彼女は寄宿生活を始めた。

同年（1930）、夫婦関係が改善できないので、黄逸梵はためらうことなくヨーロッパの弁護士をつけてきっぱりと離婚の手续を終らせた。離婚後の彼女は、愛玲の叔母と一緒にフランスの租借地にあるマンション（現存、「宝隆ガーデン」）に引越し、それぞれ実家からもらった財産で生活しはじめた。彼女たちは白い車を買ひ、ロシアの運転手を雇ひ、また、当時では珍しいガス、バスタブなども使っている。この、「生まれを二、三十年間繰り上げた」③といわれた女性—母親の生き方は愛玲の人生にどれほど大きな影響を及ぼしたのだろう。愛玲に与えた母親のイメージはこうなっている④。

彼女は美しくて敏感な女だが（中略）、子供の目において彼女は遥かに遠くて神秘的な存在だ。二回彼女に連れられて町に出掛けたことがあるが、横断歩道を渡ろうとすると、私の手が彼女に引かれると、一種の新鮮さから出たような刺激を感じ取った。

このように、彼女が母親に対する感情は肉親に対する親密の情というより、寧ろある種の美しいものへの憧れにも似た感情であると言える。

1931年に愛玲は当時の貴族中学校である聖マリア女学校（イギリスのミッション・スクール）に入った。母親はこの年から愛玲にロシアのピアノ教師をつけて

やったが、自分は翌年に一人で再度ヨーロッパに行った。この年に、愛玲は処女作—小説「不幸な彼女」を校内の刊行物に発表した。また、間もなく彼女の漫画はアメリカ人が作った英語版新聞—「大美晩報」（Evening Post）に採用され、生まれてから初めて五元のお金を稼いだ。

西洋文化に耽った母親に対して、前述したように、愛玲の父親は中国の古典文学に熱中しながら、また通俗小説なども大変好んだ。「文明」的な西洋文化と比べれば、これらは古くて俗っぽいものと思われるが、意外に、しかも容易に愛玲に受け入れられた。父の書齋に籠った彼女はそこから深い影響を与えられた。私たちは、彼女（17歳）が改作し、発表した古典小説「霸王別姫」、及び後の「紅樓夢麗」などから、愛玲の中国古典文学に対する高い素養を見ることがができる。一方、「私はFred（二度目の結婚相手）に言われたように、「塵」ばかりを読んでいる」⑤と、愛玲自身が言った通りに、彼女は通俗文学にもよく惹かれている。

愛玲の身にそなわった音楽や絵画などの西洋的芸術素養は母親の教育と深く関わりがある一方、彼女の文字、文学は中国の古典文学、民間芸能、通俗小説などから得たものが多いといわねばならない。エッセイ「西洋人の見た京劇とその他」⑥において、愛玲はこのように語っている。

西洋人の京劇を見る目つきを持って中国のすべてを見れば、寧ろ、面白いことであろう。（中略）驚きと訝りがあるからこそ、明瞭があり、信頼できる愛がある。

自国の文化を知るうえで必要なのは、完全に他者の目によって遠距離から見、批判することだ、という主張である。このような慎重な問題を冗談の口調で気軽に語ることはできるのは、彼女だけだ。

1934年に継母が愛玲の生活に入ってきた。愛玲は「私語」⑦において、父の再婚に直面させられた当時の気持ちを下記のように語る。

私の父はすぐ再婚する。この話を叔母から初めて聞いたのは、ある夏の夜、ベランダにいた時だった。私は泣いてしまったが、継母についての小説をたくさん読んだが、こんな事が私の身の上に起こったとはどうしても思わなかった。（中略）もし、あの女が目の前にいれば、私は必ず彼女をベランダから落して、徹底的に解決する。

継母のいる生活はつらくて、愛玲はできるだけ家に戻らないようにしている。しかし、弟はまた別だ。継母の傍にいる弟の生活について、愛玲は「童言無忌」(同④)に記している。

継母がきてから、私はあまり学校から帰らないが、偶に帰っても、弟がどのような生活を送っているのかはよく分からなかった。(中略)食事のとき、小さい事で父は弟の頬を打った。私はびっくりしてお椀で顔を隠しながら、涙をぼろぼろこぼしてしまった。継母は傍で「あれ、なぜ泣くの。貴方のことではないのに。彼が泣かないのに、貴方が泣くのは？」と、意地悪に笑いながらこう語った。(中略)私は歯を食いしばりながら、「仇を討つ。ある日私は必ず仇を討とう」と思った。

1936年に母親はアメリカ人のボーイフレンドを連れて再度帰国した。彼女は愛玲に留学をさせようと考えたからだ。翌年の1937年に戦争が始まったが、愛玲はロンドン大学の極東地域での新入生募集試験を受けようとした。復習のために、彼女は母親の所で二週間泊まったが、このため、彼女は継母に強く罵られ、また、前妻に強い恨みを抱いた父親に激しく叩かれた。その日から愛玲は地下室に置かれ、軟禁された。

「軟禁事件」を知った母親は、乳母を通してこのような話を愛玲に伝えた⑧。

お父さんと一緒にいれば、当然、お金がある。私と一緒にいってもお金はないから、このつらさに堪えなければならない、後悔はできない。どちらにつくかよく考えなさい。

事実として、愛玲は彼女自身語ったように、「私は拝金主義を固守する人」だ(同④)が、父親のお金が自分の手に来ることがないと分かった彼女は、1938年に乳母の助けを借りて父の家から逃げ出し、母親の家へ身を寄せた。そして、ずいぶん継母につらくあたられた弟一張子静も間もなく母親の家へ身を寄せてきた。しかし、母親は今の経済力では子供一人しか養えないと、息子に帰るよう告げた。その日、弟が泣きながら自分の靴を持って父の家に帰った姿を、愛玲は永遠に忘れられなかった。父の家から逃げ出した直後(1938年)、彼女は前述した英語版の「大美晩報」において「What a life! what a girl's life!」というタイトルで「軟禁事件」のことを書いた。さらに、1944年に彼女は中国語版「天地」という月刊誌において当時の出来事を再度語っている。事実として、「軟禁事件」以来、愛玲は父親の家に一度も戻っていなかった。

後に、愛玲は極東地域の一番優秀な成績でロンドン大学に合格したが、戦争のために香港大学に転学した。香港大学において、彼女はすばらしい成績で二つ奨学金をもらった。学校のきまりによって、彼女は授業料を払わない形でオックスフォード大学へ進学することができることになった。しかし、卒業する半年前(1941)に香港が占領され、大学は全面的に授業をやめた。愛玲は上海に戻ってから、1955年まで叔母と一緒に暮らしながら、売文の日々を送っていた。彼女の生涯において、二回結婚したことがあるが、どちらでも成功とは言えない。二度目の結婚(1956)相手はアメリカで人気を得た職業作家である。夫婦関係は円満であったが、夫は愛玲より29歳年上で結婚五年目に卒中にかかって1967年に亡くなった。

古い大家に生まれた張愛玲はその成長過程において、階層的な抑圧を受けたことのない代わりに、そのひどく歪んだ家族から人間世界の悲しみをつぶさに経験した。父親に深く傷つけられた彼女は、母親との生活に憧れた。しかし、事実として、母親の愛玲に対する寛容は少なかった。彼女は母親を満足させるために、一生懸命に優秀な成績を遂げ、自立しようとするが、つねに困難に直面した。人間世界の醜悪をよく見てきた彼女は各種の革命運動に興奮していないし、社会全体を改造しようとは思わない。ただ、彼女は早い段階で巨万の富をもつ父親と断絶し、「新女性」の母親を離れ、生命と家族との根源を徹底的に切ったのだ。これによって、彼女は早く成熟し、生命に失われたものを自ら補おうとした。愛玲の初期の作品は殆ど「彼女」という三人称をもって語られているが、自立後、私たちは愛玲の「私」という確かな声を作品から聞くことができるようになった。

3. 愛玲と一葉

愛玲は一生数え切れないほど引越しをしたが、最後にその命を終えるまで異国にあった。それは彼女が生涯において「娘」、「妻」あるいは「母親」のどれひとつ真面目にやったことがないのと同じように、彼女は人間世界の複雑さに拘束されなくなかったのだろう。比べてみれば、「母の娘」に疑問を持ちながら、終生真面目に勤めようとする一葉はずいぶん我慢強いと言える。愛玲の生い立ちは一葉の成長経歴と比較してみれば、類似した具体的な出来事はないかもしれないが、家族の没落から早々に自立し、常に他者の目で人間世界を冷徹に洞察しようとする創作主旨は同じだと思う。

また、愛玲は23歳のときに小説『沈香屑・第一炉香』で大きな人気を得たが、その年の末に中編小説『金鎖記』で彼女の作家としての位置を確立した。振り返ってみれば、一葉の創作世界において、「たけくらべ」や「にぎりえ」、「十三夜」など最も優れた数多くの作品が発表された、その「奇跡的な十四カ月」と言われた時期もちょうど彼女が23歳の年である。

書かれた作品において、両者ともに女性を巡る物語を語っている。彼女たちが女性の心象を深く掘り出せる作家といえるならば、それは、孤独や、あるいは虐待された体験が彼女たちに人間性の暗闇を見させたからだ。一葉と愛玲は両者ともに女性の書き手の完全性をそなえた作家であるが、前者が清楚だとすれば、後者は華麗でどちらも魅力的である。

今回の研究調査において、張愛玲の生い立ち、及びその作品に関する一次資料をよく入手できた。これをもって、樋口一葉と張愛玲の作品を比較する作業を行う予定である。また、この作業を通して、女性の身体に隠された様々な文化表象を見てみたい。さらに、やや時代の遅れた愛玲の表現世界を一葉の世界とパラレルに見ることによって、一葉文学の価値、その先駆性を再評価しようと思う。

注

1. 「自分の文章」・『張愛玲文集・流言』北京十月文芸出版社 2006年12月
2. 胡辛『張愛玲伝』作家出版社 1996年5月
3. 周芬伶『哀と傷—張愛玲評伝』上海世紀出版股份有限公司遠東出版社 2007年8月
4. 「童言無忌」・『張愛玲文集・流言』北京十月文芸出版社 2006年12月
5. 水晶『替張愛玲補粧』山東画報出版社 2004年5月
6. 「西洋人の見た京劇とその他」・『張愛玲文集・流言』北京十月文芸出版社 2006年12月
7. 「私語」・『張愛玲文集・流言』北京十月文芸出版社 2006年12月
8. 于青『天才奇女—張愛玲』・花山文芸出版社 1992年7月

学生海外研究調査・収集資料リスト

張晋文

一、コピー資料

- ①于青『天才奇女—張愛玲』花山文芸出版社 1992年7月
- ②刘思謙『中国現代文学研究丛书“娜拉言説”—中国現代女性作家心路紀程』上海文芸出版1993年12月
- ③胡辛『張愛玲伝』作家出版社 1996年5月
- ④張子静『我的姐姐張愛玲』学林出版社 1997年1月
- ⑤邵迎建『传奇文学和流言人生—張愛玲的文学』生活读书新知三联书店1998年6月
- ⑥刘川鄂『現代中国作家传记丛书—張愛玲伝』北京十月文艺出版社 2000年1月
- ⑦淳子『張愛玲地圖』世紀出版集团 2003年9月
- ⑧張盛寅『一个真实的張愛玲』東方出版社 2003年12月
- ⑨林幸謙『荒野中的女体—張愛玲女性主義批評Ⅰ』广西师范大学出版社 2003年12月
- ⑩林幸謙『女性主体的祭奠—張愛玲女性主義批評Ⅱ』广西师范大学出版社2003年12月
- ⑪水晶『替張愛玲補粧』山東画報出版社 2004年5月
- ⑫陳子善『説不尽的張愛玲』上海三联書店 2004年6月
- ⑬刘紹銘『到底是張愛玲』2004年12月
- ⑭周汝昌『定是紅樓夢里人』北京團結出版社 2005年5月
- ⑮王進『魅影下の“上海”书写—从“抗战”中的張愛玲到“文革”后的王安忆』广西师范大学出版社 2006年4月
- ⑯周芬伶『哀和傷—張愛玲評伝』上海世紀出版股份有限公司遠東出版社 2007年8月

二、購買書物

- 辞书編集委員会『辞海』上海辞书出版社 1999年9月
 金宏达『平視張愛玲』文化艺术出版社 1999年9月
 賈植芳主编『中国現代文学総書目』福建教育出版社1993年12月
 卓如主编『冰心全集』海峡文艺出版社 1999年4月
 林丹娅『当代中国女性文学史論』厦門大学出版社2003年3月
 朱立元『当代西方文芸理論 増補版』华东师范大学出版社 2005年4月
 夏乞尊『平屋雑文・中国現代文学』白花文艺出版社2005年5月
 夏志清『中国現代小説史』复旦大学出版社 2005年7月
 孙玉石等編『魯迅全集』人民文学出版社2005年11月
 孟悦『人・歴史・家園：文化批評三調』人民文艺出版社 2006年9月
 戴锦华『涉渡之舟 新時期中国女性写作与女性文化』北京大学出版社 2007年5月
 余斌『張愛玲伝』南京大学出版社2007年6月
 陳子善主编『張愛玲文集』北京十月文艺出版社2006年12月

【指導教員のコメント】

報告者の博士論文は、樋口一葉の文学を主な分析対象としつつ、女性にとっての〈近代〉とは何か、そしてそれが女性の〈書く〉行為とどのように交差するのかを明らかにすべく構想されている。よって、一葉よりは後代の中国人女性作家・張愛玲との比較は、時間的懸隔をこえて、抑圧的な社会構造と〈近代〉、さらに女性表現という三つの共通項によって具体化される。

この比較研究において、張愛玲についての基礎文献の収集は必須であるが、日本においては入手不可能である。よって、本「学生海外調査研究」の補助によって、中国における調査ならびに資料収集がなされたことの意義は大きい。さらに、報告書に明らかなように、調査の収穫として、張愛玲研究の基礎が文献による裏付けによってなされている。

この成果に基づき、さらに樋口一葉と張愛玲の文学の比較研究がなされることで、一見懸隔のある二人の女性作家が、〈近代〉という大きな枠組みのなかでいかなる共通性と差異を示し、そのことが日本・中国両国における女性をめぐる〈近代〉の問題とどのように関連するのか、報告者の今後の研究によって解明されることが期待される。

よって、張晋文の海外調査研究は、本プログラムの意図を十分に生かし、今後の学位申請論文執筆のための必須の調査として評価される。

(人間文化創成科学研究科 教授 菅 聡子)